

日本武尊の東征V

日本武尊は海を挟んだ対岸の上総(千葉)県に進行しようとした。目の前の海を見て声高らかに自慢して言いました。「こんな小さな海、一つ飛びで渡れるだろう。」

船が沖に進んだ時、急に暴風が吹き荒れました。そのため船は漂うばかりで先に進みません。この時、日本武尊に同行していた妃で弟橘媛が「暴風が起きて波が高く、日本武尊の船は沈むそうです。これはきつと海神がお怒りなのです。私は身分の低い身ですが、尊の代わりとしての身を沈めましょう。言は終えぬと腰は波間に身を投じました。さあさあ、暴風はさあっと止まりました。」

海を渡る



三浦半島の東海岸、海の向こうに房総半島が見えるところに日本武尊と弟橘媛は滞在していました。しばらくしていよいよ出航の朝となりました。川面を見ると、倭姫から授けられた宝剣によって水を金色に輝かせていました。そのためここを「金川」(神奈川の地名所以)と言うようになりました。

対岸の房総半島上総の方を見やると山々はとても近くに見え、海も穏やかでした。日本武尊はこの海に向かって「こんな海なら一つ飛びだ」と叫んだのです。

出発の時、これまでのもてなしに感謝した日本武尊は村の長に冠を与え、土中に埋めて社を建てました。そこが神奈川県横須賀市の走水神社(上写真)です。



橘 弟 は に 内 境

姫のプレート「舵の碑」(上左写真)があります。東京芝公園に日露戦争で亡くなった佐渡丸の乗組員を慰霊するため弟橘媛の銅像が立てられています。が、関東大震災で崩壊してしまっただけです。再びこれを建てようと画家の飯塚氏がこの慰霊の志を受け継ぎ、浦賀水道の全ての船の航行の安全を祈りこのプレートを作成したと聞きました。

海神の怒り

船出した一行でしたが、急に海が荒れ、転覆する船もありました。このままでは日本武尊が乗った船も遭難してしまい、東国の平定を見ることなくここで尊の命は消えてしまうかもしれません。弟橘媛は、この海の急変は尊が海の尊さを軽んじて叫んだことがもとで海神の怒りにふれてしまったのだと思いました。そのため、この怒りを鎮めるためにはわが身を捧げなければいけないと悟りました。

船の端に立った弟橘媛は日本武尊と過ごした日々ことや、火の海の中この身を守ってくれたやさしいまなざしを走馬灯のように思い出し

「さねさし さがむのおぬにもゆるひの ほなかにたちて とひしきみはも」と歌を詠みました。そして、日本武尊の方を振り向くと、自ら海に身を投げ消えていきました。

『古事記』では弟橘媛が海に入ろうとするとき、菅笠、皮笠、きぬ笠八重を

波の上に敷いてその上に下りたと書かれています。この時弟橘媛は次のような歌を詠んでいます。

佐泥佐斯 佐賀牟能哀怒邇 毛由流肥能 本那迦邇多知豆斗比斯岐美波母

(相模の小野の燃える火の中で、私のことを氣遣って声をかけて下さったあなたよ)

*小野は単に野原を意味する。あるいは「小野」という地名をさします。

弟橘媛が身を投げてすぐに波風がおさまり、一行は無事に上総国に着岸することができました。これは美談とも思えますが、最愛の妻を亡くすことになった悲劇です。日本武尊の活躍の陰には倭姫命や弟橘媛のような大切な女性の存在があるようです。

弟橘媛の遺品

弟橘媛命が入水してから数日して、出航した走水の海岸に櫛が流れつきました。村人たちはそれを走水神社前の御所が崎に社を建てて納めました。これが橘神社です。明治時代に御所が崎が軍用地になったため、橘神社は走水神社に合祀されました。走水神社には弟橘媛命記念碑が立っています。また、弟橘媛命に殉じた侍女も本殿横の別宮に祀られています。



別説 弟橘媛は島の

弟橘媛



「弟橘媛」は『日本書紀』による漢字表記です。『古事記』は「弟橘比売命」と書いています。父は東征に同行した穂積氏忍山宿禰(すくねのやまのすくね)で香川県の出身とされています。『西讃府志』によると「弟橘姫ハ讃岐人穂積氏忍山宿禰ノ女也」とされています。弟橘媛が誕生する以前、父は香川県に住んでいたこととなります。香川県善通寺市に大麻神社があり、境内には白玖祖霊社(写真右)という弟橘媛を祀る神社があります。



忍山宿禰は物部氏と同族の穂積氏の祖となっています。讃岐を出た次の任地が三重県亀山市であったようです。三重県亀山市の忍山神社(写真左)は垂仁天皇の時代、倭姫命が御杖代となって天照皇大神の鎮座の地をもとめて各地を御遷幸されていた際に天照大神を奉じた元伊勢の鈴鹿小山宮跡の有力候補地とされています。倭姫命の滞在前に忍山宿禰が神官として忍山神社に就いていました。そして、ここが弟橘媛の生誕地と言われています。弟橘媛が海に身を

を投げて数日経ってからのことでした。走水の海を囲む各地の海岸に弟橘媛の遺骸や媛が身に付けていた遺品が流れ着きました。村人たちはそれを埋めて神社を建立して祀ったと伝えられています。弟橘媛が着ていた服の袖が流れているところは「袖ヶ浦」という地名がついたとされています。



弟橘媛が祀られている神社の多くは、媛が海に身を投じた後に遺骸や遺品が流れ着いたとされる海岸近くにありま



橘はミカン科ミカン属の常緑小高木で日本原産とされています。古代にも自生していた柑橘類で、実はミカンと同じですが酸味が強く食用には適さないようです。いつも香り高い実がなることから記紀に「ときどきのかきのみ 非時香果」と書かれ、これが異名となっています。

弟橘媛の入水に諸説あり

日本武尊軍を乗せた船団は東京湾を東に房総半島に向けて出航しましたがすぐに暴風となつて進めなくなりました。仕方なく一旦出航地に戻り、御所を造って風が収まるのを待ちました。日本武尊らはここで一か月間過ごししました。この御所があったところを御所崎といひます。周りに旗を立てたので旗山ともいひます。しかし、いくら待っても荒れた海が静まりません。すると、日本武尊に同行していた妃の弟橘媛が「これは海神がお怒りなのです。これを鎮めるには私の身を海に捧げるしかありません。」と言いました。これを聞いた日本武尊はうなづき、御所崎先端の御所島(御座島)で別れの盃を交しました。



弟橘媛は岩の上から海に身を投げました。これを知った十人の侍女たちも姥島のむぐりの鼻から身を投げました。やがて海が静まり、日本武尊らは船を出すことができました。日本武尊らは皇島から出航しました。船は海の上を滑るように進みました。これを見て尊が「水が走る」と言ったので「走水」という地名になりました。これが走水神社の名の所以です。